

絵本画家クリスティーが目指すもの

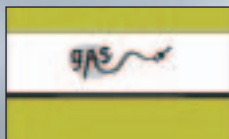
# アーティストであることと、 黒人であることの狭間で

子どもの頃からひたすらに絵を描き続け、ユニークな画風により、  
若くして絵本画家としての成功を収めたR・グレゴリー・クリスティー。  
恵まれた生い立ち、異国文化への興味、出版界のシステム……  
クリスティーさんのインタビューからは、彼のアートへの情熱と共に、  
今もなお、あらゆる場面で人種による区分けが成されるアメリカ社会と、  
アート界の様相までもが浮き上がってくる。

## PROFILE

リチャード・グレゴリー・クリスティー | R. Gregory Christie

ニュージャージー州出身。  
1993年、ニューヨークのスクール・オブ・ヴィ  
ジュアル・アーツ卒業。専攻はファインアート。在学中  
から6年間グッゲンハイム美術館の警備員、その後  
に画家のアシスタントを2年務め、2002年より  
絵本画家として独立。1997年、デビュー作『The  
Palm of My Heart』、2000年『とどまることなく〜  
奴隷解放につくした黒人女性ソジャーナトウルース  
(邦題)』、2006年『Brothers in Hope』が、黒人  
児童書を対象とするコレッタ・スコット・キング・  
アワードのイラストレーター栄誉絵本賞を受賞。  
他にもニューヨークタイムズ年間優秀絵本賞など  
を受賞。現在、黒人発明家ギャレット・モーガンの  
伝記アニメDVDを制作中。



## WEB

Gregarious Art Statements - The art of R. Gregory Christie  
<http://www.gas-art.com>

絵本とDVDを同時進行で制作中。  
「今夜は徹夜になるね」と言いな  
がらも、長時間のインタビューを  
楽しむクリスティーさん。

“果てしない土地に建つ掘っ立て小屋や木造の食料品店、  
やせっぽちな女の子、ほこりっぽい道をとぼとぼ歩く犬……  
あの南部の田舎の風景も、あそこに住んでいた叔母や叔父も、  
僕の絵の大きなインスピレーションになっているんだ”

## 人間と藝術

### 絵本画家クリスティーが目指すもの

画家 | R・グレゴリー・クリスティーさん

どんな絵を描くのか、  
ワクワクしながら目覚める朝

「あと数ヶ月したら、上海に行くんだ。3ヵ月滞在して絵を描くんだよ!」

ニューヨーク・ブルックリン在住の絵本画家R・グレゴリー・クリスティーさんは、いかにも待ち切れない様子だ。年内は2冊の絵本と、彼にとって初の試みとなるDVDの制作に没頭することになっている。睡眠時間は4〜5時間で充分というクリスティーさんは、今の多忙さを楽しみながらも、異国の地で一切の制約なしに、自分が本当に描きたい絵だけを存分に描ける時間を心待ちにしている。

とはいっても、絵本やDVDを、収入を得るためだけの仕事と考えているわけでは、決してない。

「今、『ジャズ・ベイビー』という絵本を描いている最中なんだ」と、主人公の赤ちゃんの顔をいくつも試し描きしたアートボードを画台に載せる。絵の具だらけで角がすり減った画台は、13歳の時から使っているものだ。

「この赤ちゃんの表情はダメだね。こっちの顔も魂がない。ほら! この表情はいいね!」と、最も生き生きした顔を指差す。

『ジャズ・ベイビー』はジャズがテーマとはいえ、幼児向け。作家が書いた文章はシンプルなフレーズの繰り返しのみで、物語の細かいディテールはない。クリスティーさんは文章を繰り返し読み、イメージーションをふくらませる。やんちゃな赤ちゃんと家族のジャズにまつわる愉快な騒動が、ヴィヴィッドな色彩と共に、どんどんヴィジュアル化されていく。絵と言葉だけのページから、ジャズのリズムが聞こえてくるようだ。

「毎朝、『今日はどんな絵が描けるだろう?』



stranger

異国の地を不安げに彷徨う男性は、ひんぱんに海外を訪れるクリスティーさん自身の投影かもしれない。



## とどまることなく | Only Passing Through

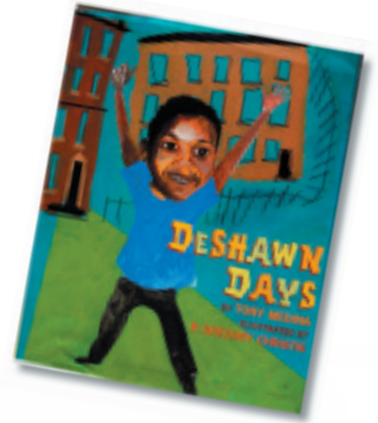
絵本『とどまることなく』邦訳版

2002年、国土社より発売。1,575円（税込）

## ディショーン・デイズ | Deshawn Days

絵本『ディショーン・デイズ』表紙 2001年

ゲットーに暮らす少年の日常生活を生き生きと描写した物語。クリスティーさんは、都市部の貧しい子どもを支援するプログラムの参加を考えたが、海外滞在が多いために果たせないままにいる



とワクワクしながら目を覚ますんだ」と笑うクリスティーさんは、まさに根っからのアーティストなのだ。

### ■ パラパラマンガと南部の風景

クリスティーさんが育ったのは、ニューヨークに隣接するニュージャージー州のプレインフィールド市。

「僕らが住んでいた黒人地区も、近所にあったアイルランド系やイタリア系の地区も、みんな中流だった。だから僕が通った高校は、公立なのにやたらとレベルの高い美術の時間があった。アート大学に入った当初、『こんなこと、全部、高校でやったよ』と思ったくらいだ」

アメリカは人種社会であると共に、昔からの格差社会でもある。同じ人種やエスニックの中で、さらに所得層別のグループが形成され、時には人種よりも所得の違いがライフスタイルを分かち大きな要素となる。優れた高校に通えたこと、ニューヨークの有名なアート大学に進学できたことを、クリスティーさんは中流家庭に生まれたゆえの恩恵だと考えている。

「小さな頃はとてもシャイだった。家に閉じこもってパラパラマンガばかり描いていたんだ。



絵本『ジャズ・ベイビー』のための習作

サメとか、戦闘機とかのね(笑)』

そんな息子を心配した両親は、他人と接することを学ばせるために家庭教師を雇った。これも経済的なゆとりがあればこそ。それでも金曜日の放課後から土日は、ひたすら絵を描いていたと振り返る。

「夏休みには母の故郷ルイジアナ州によく行ったよ。果てしない土地に建つ掘り立て小屋や木造の食料品店、やせっぽちな女の子、ほこりっぽい道をとぼとぼ歩く犬……あの南部の田舎の風景も、あそこに住んでいた叔母や叔父も、僕の絵の大きなインスピレーションになっているんだ」

### ■ 黒人画家のジレンマ

これまでにクリスティーさんが手掛けた絵本の多くは、黒人の子どもを主人公にしたもの。出版社が、黒人作家の作品には黒人画家を選ぶからだ。

長年にわたる差別の時代を経て、ようやく社会進出を果たしたアメリカ黒人は、自分たちの歴史と文化に誇りを持ち、それは、ともすれば“黒人文化は他者には理解も表現もできない”という考えにつながる。

黒人絵本のイラストを白人画家に依頼すれば、反感を招くこともあり得る。ゆえに、クリスティーさんに黒人絵本の依頼は多数来ても、逆に、それ以外の作品を描くチャンスは、なかなか来ない。彼は、こんな現状をポリティカリー・コレクト(※1)と呼び、苛立ちを隠さない。

同時に、アート界には黒人画家がもっと進出するべきだと考えている。

「グッゲンハイム美術館に勤めていた頃、黒人画家の作品が展示されているのを見たことがないよ。まだ黒人のアートを受け容れる段階に

来ていないんだね。今、活動している黒人画家たちは、死後によく有名になれるのかもわからない」

刺激に満ちたニューヨークが好きだと言うクリスティーさんは、しかし「アメリカという国が好きか」の問いには、答えあぐねる。

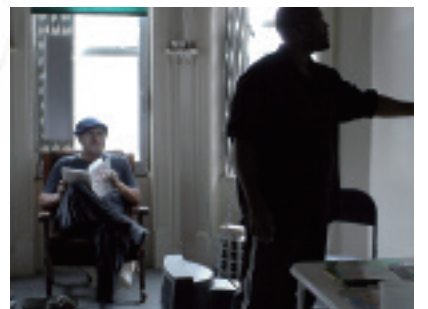
「……嫌いとは言えない。僕はアメリカ人であり、この国が僕をつくったわけだから。でも、この国は奴隷制を敷いた国でもあるんだ」

彼の本棚には、ズラリと並ぶアート書に混じり、黒人史の書籍がある。奴隷解放に尽した黒人女性ソジャーナ・トゥルースの伝記絵本『とどまることなく(原題: Only Passing Through)』を描く際に読んだものだ。

南北戦争を経て奴隷解放宣言が出されたのは1863年。それから150年近くも経つ現代に生きる絵本画家にすら、アメリカ黒人史の影はつきまとう。

### ■ 異なる文化と歴史の間にある垣根を取り払うこと

クリスティーさんの絵本をめくると、大胆な筆遣いとカラフルな色彩で描かれた登場人物が、目に飛び込んでくる。



クリスティーさんがアーティストになることを応援してくれた父親は、元製薬会社勤務

※1 政治的に正しいとされること。時に建前だけの言動を皮肉を込めて指す。



## Sava

絵本『中庭の支配者（原題：Ruler of the Courtyard）』2003年より

ニワトリを恐れるパキスタン人の少女が、恐怖を克服して勇気を得る物語。数少ない、非黒人を主人公にした作品



## The Complete 1961 Village Vanguard Recordings

ジャズの巨人、サクソ奏者ジョン・コルトレーンのCDボックスセットの内ジャケット

ラッパーの真似をする少年、ジャズに陶酔するドレッドロックの女性、どっしりと家族をまとめるおばあさん、街角に佇む、どこか情けない風情の男……。アメリカの黒人街なら、どこでもお目にかかれるキャラクターたちだ。

黒人画家としてのみ評価されることを良しとはしないクリスティーさんが、リッチな黒人文化を描くこと自体は、心の底から楽しんでいる。ただし、彼が使うユニークな色のコンビネーションは、実際のアメリカ黒人街にはあり得ないものだ。

クリスティーさんは海外に出掛けることが多く、これまでタイ、インドネシア、スウェーデン、オランダ、フランス、ドイツなど10カ国に滞在した。目的は、それぞれの土地固有の文化を吸収し、自身の絵に反映させること。これが独自の色遣いの源だ。

「アートとは、異なる文化と歴史の間にある垣根を取り払うことなんだ」

そうやって見知らぬ国の空気を吸ってニューヨークに戻って来ると、再び自宅のスタジオにこもる。スタジオには質素なソファベッドがあり、そこで寝る。無用の会話で時間を無駄にすることを防ぐために、携帯電話はあえて持た

ない。調理の時間も惜しく、料理の得意な学生をシェフとして雇ったことすらある。実はファインアート（純美術）への転向を目指し、ひそかに油絵も描いているのだ。

「僕の心はね、常にファインアートにあるんだ」

人懐っこい笑顔で夢を語る彼は、絵本の中の少年たちよりも、さらに無垢に見える。けれど、決してナイーブではない。アメリカのアート

界で、黒人がファインアート画家として成功することの難しさは十分に知っている。だからこそ「今は準備期間」だと言い、自分で練った長期プランに沿って、ひたすらに絵を描くのだ。

画家R・グレゴリー・クリスティーの人生において最も重要なことは、「アーティストであり続けること、そして一生、成長し続けること」。

Text by: 堂本かおる



クリスティーさんが目指すファインアート。背後はモハメド・アリの伝記絵本『The Champ』（2004年）の原画

## 人間と藝術

# 絵本画家クリスティーが目指すもの

画家 | R・グレゴリー・クリスティー